



水稲11町歩 楽らく施肥で4日間で回りきる



波田野裕男さんは水稲11町歩、麦6.5町歩、大豆8町歩を栽培されている生産者です。水稲の追肥(穂肥)に千代田化成(水稲楽らく施肥専用)の流し込みをされています。その理由や、使い方について紹介していただきました。

■適期に追肥をしたい

「大きくやるようになったのは8年ほど前からです。それまでは5町歩程度だったからミストで撒いても苦にならなかった。」
長野県松本市の田植えは5月の連休頃から始まります。追肥(穂肥)の適期は7月上旬〜中旬です。
「追肥の適期は限られています。その時期にちゃんと追肥をしたい。規模を拡大すると適期に撒くのが難しくなってくる。」
波田野さんが千代田に出会ったのは、規模を広げたいと考えている時期でした。



追肥適期の田

■流し込みは作業が楽だし

時間も短縮できる

「業者さんに、楽だからと紹介されたのがきっかけです。今では一日に10カ所以上回ります。」
畑や田があちこちに点在しているため、軽トラで移動しながら作業します。
「流し込みをする時に、一つの田に回ると時間は20分くらい。一袋の三分の一が出たら次の田に移動します。作業も楽だし、時間短縮が出来るので何か所もこなせます。今日もこれから八ヶ所回ります。」
このお話を伺ったのが午後二時頃でした。日暮れまでには十分回れるそうです。



流し込み開始

■楽だから出来る

「身体が楽だということよりも、短時間で何カ所も出来るのが最大の利点です。」
松本でも大規模農家が増えています。「作業が楽だから規模が大きくても仕事がこなせる。」楽らく千代田でなければできません。
取材が終わるや否や軽トラに乗りに込み、颯爽と次の田へ向かわれた波田野さん。
お忙しいところご協力いただき、ありがとうございました。

■ポイントは「水」

「ほとんどの田が二〜三反歩です。稲の状態を見ながら一つの田に二〜三袋入れます。」
無造作に鎌で袋の角をザクツと切りましたが、そこはプロ。穴の大きさもちゃんと計算されています。
「一定量の水をドースと入れ続ける感じ。多すぎても少なすぎても駄目です。」
水口の傾斜を利用して、袋を寝かせた状態で入れ始めました。



最初は袋を寝かせた状態で



3分の1出たら袋を立てる

「三分の一が出たら袋を立てます。こうしておけば放っておいても出続けます。」
二反歩の田で所要時間は約一時間。
「入れ始めるときの田の水深は浅め。水を入れ始めたら出来るだけたっぷり入れたほうが良いように思います。」
一年目は失敗したそうです。
「コツがつかめなくてね。水を勢よく入れたらかえって奥の方まで行かなくて。あまり勢よく入ると、田の中の暖かい水と、入ってきた冷たい水が混ざらないんです。」
さすがに細かいところまで観察されていました。



「これから8カ所回ります」

■編集後記
機械化が進んだとはいえ農作業は重労働です。「作業は楽なほうがいい。」生産者の皆さんの切実な思いです。ただこの取材では「楽だからたくさん出来る。」という生産者に会いました。
こう考える生産者が増えたら、日本の農業はもっと力強くなるのではないかと、そう感じた取材でした。